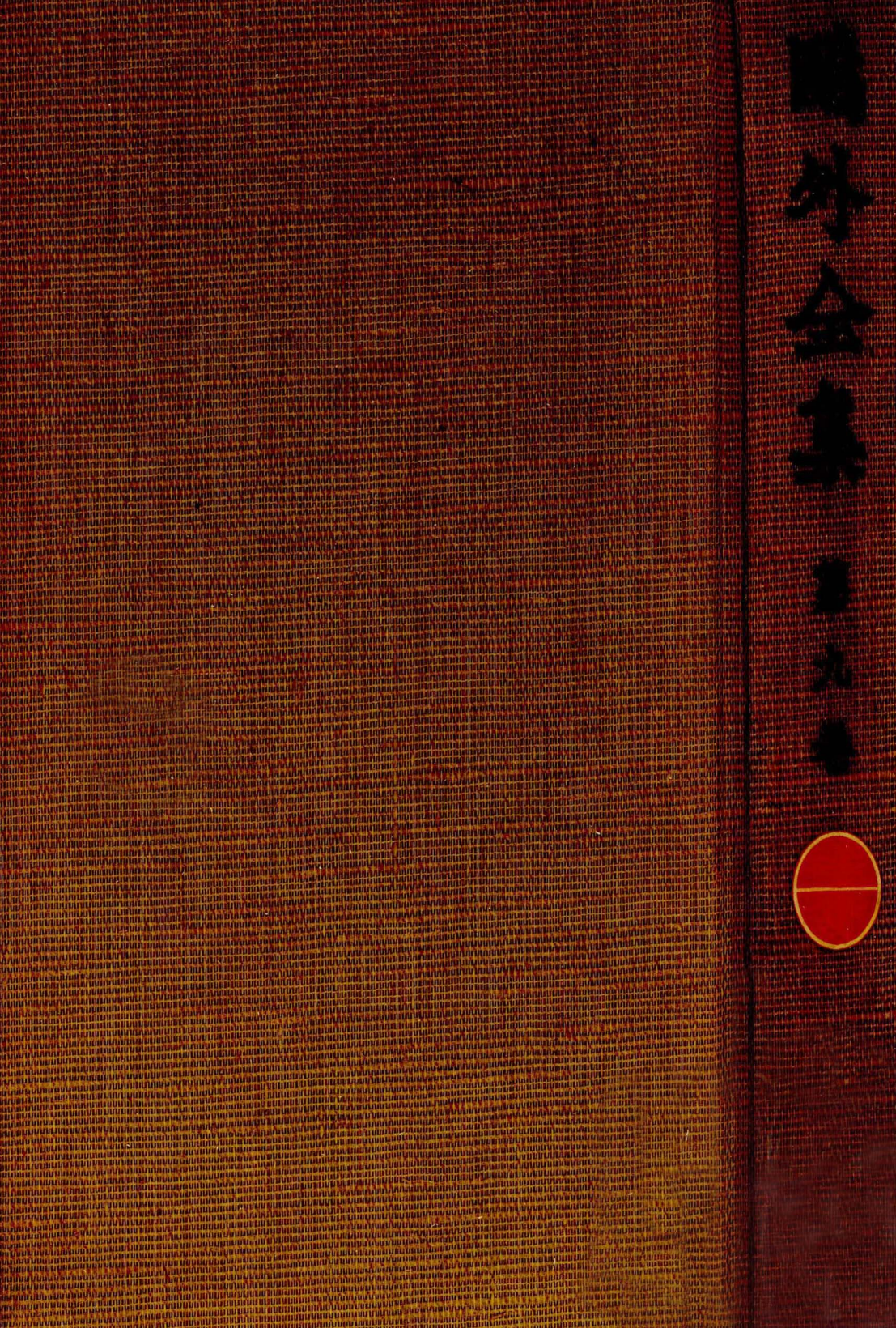




鷗外全集

第九卷

第九回配本（全三十八卷）

鷗外全集 第九卷

定價貳千圓

昭和四十七年七月二十二日 發行 ©

著 者 森 林 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

幽霊 イブセン

一

百物語

一二七

灰 燼

一四七

手袋 ビヨルンソン

二三五

みれん シュニツツレル

三四三

樺太脱獄記 コロレンコ

四八七

女の決闘 オイレンベルク

五六一

後記

五七七

幽靈

HENRIK IBSEN.

人物

ヘレエネ・アルキング、故陸軍大尉侍従アルキング氏未亡人

オスワルド・アルキング、その息子、畫家

牧師マンデルス

指物師エングストランド

レイネ・エングストランド、未亡人アルキングの家に仕ふる女中

物語りの場所は諾威國西部の大港灣に沿へる未亡人アルキング氏所有の莊園なり。

第一幕

廣々としたる別莊の座敷。左の壁に戸口一つ、右の壁に戸口二つあり。座敷の中央に圓卓を据ゑ、その周圍に椅子數多置きあり。卓の上には書籍新聞雜誌を載す。前の方左に窓一つあり。その傍に小さきソファを置き、ソファの前に縫物卓を置く。背景は座敷より狭き、明け放ちたる花物の溫室にて、外圍ひは大版の硝子を嵌めたる硝子壁になりゐる。溫室の右の壁に戸口ありて、園に降り行くやうになりゐる。外圍ひの硝子壁を透して陰氣なる階段の景色を見る。この景色はしと

しとと降る雨に包まれるる。○指物師エングストランド園に通ずる戸の内に立ちゐる。左の脚少し曲りて、その靴底には木枕を打ち付けあり。女中レジーネ虚の如露を手に持ち、指物師の近づき来るを遮り留めゐる。

女中。(かすめたる聲にて) なんの用があるのだらうねえ。そこをお動きでないよ。その體からは雨がぼたぼた

垂れるぢやないか。

指物師。でもこれは難有い神様のお降らせなすつた雨だよ。

女中。さうぢやないわ。悪魔の降らせる雨だわ。

指物師。なんといふ物の言ひやうだい。(蹴を引きつゝ二三歩温室に進み入る) あのなんだよ。己のけふ言はうと思

つて來たのは。

女中。そんなにばたばた足踏みをしては困るぢやないか。若旦那が上でお休みになつてお出でなさるのに。

指物師。今時分轉がつて寐てゐるのかい。晝日なか。

女中。大きにお世話だわ。

指物師。實は己はゆうべ飲んでな。

女中。大方そんな事だらうと思つたわ。

指物師。だつてお前爲方がないぢやないか。人間といふものは弱いものだ。

女中。それはさうだわ。

指物師。それに世の中には誘惑といふものが澤山あるのだからなあ。それでも己は、自慢ぢやないが、けさ

は五時三十分にきちんと爲事場に来てゐたのだ。

女中。もう分かつてゐてよ。なんでも好いからさつさとお歸りよ。わたしこゝにかうして立つてゐて、お前さんと話がしてゐたくはないわ。

指物師。なぜ己がゐるのが邪魔になるのだい。

女中。誰かがお前さんのこゝにゐるのを見附けると、わたし困るわ。だからさつさと歸つて頂戴よ。

指物師。(二三歩近づくと)ところがお前に言ふ事を言つてしまはない内は、己は行かない。けふの午後になるとあそこの學校の爲事がおしまひになるのだ。さうすると己は今夜の内に蒸汽に乗つて町へ歸るのだ。内へ歸るのだ。

女中。(つぶやく)さう。間違ひのないうちに片付いたら早く歸るが好いわ。

指物師。手前親切だなあ。なんでもあしたはあの寄宿舎の開場式があるといふ事だから、こゝにゐると酒が澤山飲めるのだ。そこでこのヤアコツプ・エングストランド様が、それが飲みたさに爲事が済んでから泊つてゐたとは誰にも云はせない積りだ。

女中。おやおや。

指物師。さうぢやないか。なんでもあしたは好い人が町から澤山來るのださうだ。牧師のマンデルスさんも來るといふ事だ。

女中。牧師さんはけふの内に來なさる筈だわ。

指物師。それみる。そんないろんな人が来るのだから、己が酒に未練があつて、泊つてゐるとは云はせたく

ないのだよ。

女中。成程そんなわけなのね。

指物師。どんなわけだと云やあがるのだ。

女中。(相手の顔をきつと見る。)なんだつてお前さん又牧師さんを騙しに掛かつてゐるのだね。

指物師。しつ。手前氣でも違つたのか。己が牧師さんを騙すのだと。とんでもない事だ。あんな己に親切に

して下さる牧師さんを騙したりなんかして済むものかい。それはさうと己がお前に言ひに來たのは、己が

今夜の内に内へ歸るといふ事なのだ。

女中。歸るが好いわ。早く歸るだけ好いわ。

指物師。ところがお前を連れて歸らうといふのだ。

女中。(口を大きく開きて、呆れる。)あの、わたしを連れて行くのだつて。ほんとにさうなの。

指物師。さうよ。お前を内へ連れて歸るのだ。

女中。(嘲笑ふ。)わたし内へなんぞはこれから先だつてどうしても歸らない事よ。

指物師。ふん。さう手前の思ひ通りになるかどうか。

女中。わたしの思ひ通りにならなくつてさ。わたしはね、こゝの侍従様の奥様のお手元で育つたのだよ。大

抵な事はこの内のお嬢さん同様にして戴いてゐるのだよ。それをお前さん内へ連れて行かうといふのかい。

あんな内なんかへ。厭な事だ。

指物師。べらばうな。それはなんだ。手前は親の言ふ事を聞かないのか。

女中。(相手の顔を見ずにつぶやく)でもお前さんわたしなんぞは當にはしないと何遍云つたか知れはしないよ。

指物師。己がなんと云つたつて、それがどうしたといふのだ。

女中。それにお前さんわたしの事を何遍も何遍も悪く云つて、いつかなんぞはばいただなんて云つたぢやな

いか。厭な。

指物師。嘘を衝け。己はそんな口ぎたない事を言つた覚えはない。

女中。嘘なもんですか。お前さんがばいただと云つたのをわたしちやあんと覚えてゐるわ。

指物師。ふん。もし云つたらそれは酔つぱらつて云つたのだ。どうも世の中には誘惑が澤山あるからなあ。

女中。お前さんのお酒に酔つた時の事を思ひ出すとぞつとするわ。

指物師。それに己が手前を悪く云つたのは、いつもお袋のつんけんしてゐるのが癪に障つて、面當てに云つ

て遣つたのだ。どうかしてあいつを悔しがらせて遣りたかつたからなあ。いつでもあいつは上品振りや

あがつてこんな事を云やあがる。(聲色を遣ふ)「およしよ。わたしに構つておくれでない。わたしはこれで

も侍従のアルキング様のお屋敷に三年御奉公をしたのだからね。」(笑ふ)外道。あいつはこゝの旦那が、自

分の勤めてゐる間に大尉さんから侍従になりなすつたのをうぬが手柄のやうに思つてゐやがつたのだ。

女中。ほんとに母あさんは可哀相だつたわ。お前さんが責め殺したのであんなに若くて亡くなつてしまひな

すつたのだから。

指物師。^{さしものし}（身を反らす。）いつでもさう来るのだ。何もかも己のせいだらうよ。

女中。^{ぢよちゆう}（顔を背け、小聲にて。）ああ厭だ。それになんといふ脚だらう。

指物師。なんだと。

女中。^{ぢよちゆう}。ピエ・ド・ムウトンだわ。

指物師。それは英語かい。

女中。^{ぢよちゆう}。ええ。

指物師。兎に角稽古だけはこゝでしつかり爲込んで貰つたに違ひない。それだけはこれからこつちの役に立

たうといふものだ。

女中。^{ぢよちゆう}（暫く黙りて。）そしてわたしを町へ連れて行つてどうしようといふの。

指物師。なんにも不思議な事ぢやあない。年を取つた親爺が一人娘をどうするものか。己は年を取つて寂し

い鰥暮らしをしてゐるのぢやないか。

女中。^{ぢよちゆう}。そんな好い加減な事をわたしにだけは言つておくれでない。なぜどうしてわたしが町へ歸らなくては

ならないの。

指物師。さう。實は己は新規に遣つて見ようと思ふ事があるのだ。

女中。^{ぢよちゆう}。お前さん、これまでだつて度々いろんな事をして見たのだけれど、いつだつて旨く行つた事はないわ。

指物師。それはまあそんなものだ。だがな今度こそ手前がびつくりしないやうにするが好い。べらばうめ。

女中。(足踏みす) 悪態はお廢しよ。

指物師。しつ。これは己が悪かつた。實は己は手前に話さなくてはならない事があるのだ。今度の寄宿舎を

建てる一件で己は大ぶ金が出来たよ。

女中。ほんと。それは好い事ね。

指物師。當りまへぢやないか。こんなところで儲けた金をなんに使ひやうもないからなあ。

女中。そこでどうするといふの。

指物師。そこで己の考へでは、その金を元手にして何か實入りのあるやうな爲事を始めようと思ふのだ。舟

乗りの來る料理屋を遣つて見ようかと思ふが。

女中。まあ厭だ。

指物師。ところが上等の料理屋なのだ。マドロスの來るやうな居酒屋とは違ふぞ。べらばうめ。なんでもか

う船長だの機關士だの、いろんな上等の客の來る内にするのだ。分かつたか。

女中。そこでわたしをどうするといふの。

指物師。手前にすけて貰ふのだ。勿論只見掛けだけの事だ。なんにも骨の折れる事をさせやしない。お前は

したい事をしてゐれば好いのだ。

女中。それはしたい事をしてゐなくつてさ。

指物師。だがな、兎に角さういふ店でみれば、女がゐなくちやあならない。それは知れ切つた事だ。晩になりやあ歌つたり踊つたりして、なんでも賑かに遣るのだ。世界を股に掛けて船乗りをする客を相手にするのだからな。(近く進み寄る) 手前自分の出世が出来るのを知らないで厭だなんぞと云ふのぢやないぞ。こゝに此儘かうしてゐて手前はなんになるのだ。こゝの奥さんにいろんな躰をして貰つてそれがなんの役に立つのだ。人の話に聞きやあ、寄宿舎が出来たら、手前そこへ這入る子供の世話をするのだといふ事だ。それが手前に向く爲事だと思ふかい。小ぎたない餓鬼を相手に體が粉になるやうな爲事をするのが手前だつて大して望みでもあるまいぢやないか。

女中。それはさうよ。それはわたしの思ふやうになる事なら。まあそれは跡の事だわ、跡の事だわ。

指物師。跡でどうなるといふのだい。

女中。大きにお世話だわ。そのお前さんの溜めたお金といふのは澤山なの。

指物師。さうさな。彼此で七八百クロオネンはあらうよ。

女中。悪くない事ね。

指物師。何かちよいとした事を始めるには澤山だ。

女中。そしてお前さんそのお金を少しもわたしに分けてくれようとは思はないの。

指物師。さうさ。まづそんな積りはないな。

女中。わたしに着物一つ拵へてくれようと思はないの。

指物師。それは己の云ふ通りにして、一しよに町へ歸つて行けば、着物なんぞは好きな程拵へて遣る。

女中。おや、馬鹿らしい。わたしそんな氣になれば、着物なんざ自分で出来るわ。

指物師。ところが親の親切な手に付いて稼ぐ方が得なのだ。小港町に好い家があるのを、己は手に入れる積りだ。それには大した現金は入らないのだ。そこを船乗りの宿にしようと思つてゐる。

女中。でもわたしお前さんと一しよには行かないわ。お前さんなんかと一しよになら、わたしなんにもする氣はないわ。厭な事だ。

指物師。べらばうめ。一體手前己の所へ戻つたつてどうせ長く己の傍にゐるのぢやあない。己がなんと思つたつて、さう旨くは行くまいて。手前が旨くさへ遣れば、ちよいとの間に何かしら出来るに違ひない。この二三年にひどく好い女になりやあがつたからな。

女中。それがどうだといふの。

指物師。知れた事さ。ステイヤスマンだとか、旨く行けば船長とかいふ奴が生け捕れるのだ。

女中。わたしそんなものゝ女房にはならなくつてよ。一體船乗りなんかはサヴァアル・ギイヴルが無いのだから。

指物師。何がないのだと。

女中。いゝえね。わたし船乗りなんといふものは好く知つてゐるけれど、亭主に持つやうな人間ぢやないわ。指物師。そんなら亭主にはしないさ。外に得の行くしやうがあるからな。(内證らしく)それ、あの遊山船に乗

つて來た英吉利人奴は三百弗出しやあがつた。その癖あいつは手前ほど女が好くはなかつたのだ。
女中。(二歩進む)なんだね。耻知らずが。さつさところを出てお出で。

指物師。(たじたと跡へ引く)そんなに手荒くするなよ。まさか己を打つ積りぢやあるまいな。

女中。それは打つかも知れなくつてよ。おつ母さんの事なんか言へば。さつさと出て行つておくれ。(相手を

園の戸口まで押し遣る)それからその戸をばたりと締めるのぢやないよ。若旦那が二階で。

指物師。寝てゐるといふのかい。それはもう聞いてゐる。だが少し變だなあ。手前はいやに若旦那の肩を持

ちやがる。(小聲にて)はてな。さうして見ると若旦那が手前の。

女中。出てお出でよ。早くおし。どうかしてゐるのだよ。その方から出るのぢやない。そこからは牧師さん

が入らつしやるのだわ。あつちの勝手の方の梯子へ行くのだよ。

指物師。(右手へ歩みつゝ)うん。行くよ行くよ。だがな、今遣つて來る先生と好く話をするが好い。子といふ

ものが親にどうしなくつてはならないといふ事は、先生が知つてゐなざる筈だ。兎に角己は手前の親だぞ。

もしさうでないといやあ、お寺の帳面を調べて見れば分かる。

(第二の戸を女中開き、そこより指物師を出し遣り、跡を鎖す。さて女中は忙はしく鏡の前行き、ハンケチにて顔をはたき、指先にて襟飾を直し、それより花物をいぢりゐる。そこへ牧師マンデルス外套を着、蝙蝠傘を持ち、小さき鞆を革紐にて肩より掛け、園に降るゝ戸口より登場)

牧師。レジネさん、今日は。

女中。(不意に聲を掛けられ、驚き、同時に嬉しがる様子にて振り向く。) まあ。牧師様で入らつしやいましたか。もうお

舟が着きましたの。

牧師。丁度今着いたのですよ。(前の座敷に歩み入る。) かう留めどもなく降られては溜まりませんね。

女中。(跡に付き行く。) でもお百姓の爲めには結構なお濕りなのでございませう。

牧師。それはお前さんの云ふ通りだ。兎角わたし共のやうに市中に住んでゐるものは、そんな事は考へませんよ。(外套を脱ぎ始む。)

女中。どれお手傳ひ申しませう。まあ、ひどく濡れてゐます事。ちよつとあちらへ掛けて置きませう。序に

その蝙蝠傘もあちらへ持つて參つて、乾くやうに擴げて置きます。(品物を持ち、右の第二の戸口より退場。牧師靴を脱し、帽と共に椅子の上に置く。その内女中再び登場。)

牧師。やれやれ。屋根の下へ這入つて安心しました。そこで、お屋敷に別にお變りはありませんでせうね。

女中。難有うございます。

牧師。でもあしたのお支度でお前さんなんぞもさぞ忙しいでせうね。

女中。えゝゝゝ。それは中々御用がございますの。

牧師。奥様はお内でせうね。

女中。お内でございます。只今お二階の若旦那様のところへ、チヨコレエトを持つて入らつしやつたところでございます。